

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

—治療過程を中心に—

福永博文¹⁾ 丸井文男

1 はじめに

自閉症候群の成因論を考える時、心因論、器質的脳障害論、素因論など多くの仮説が述べられているが、双生児にそれが発症した事例を研究することは、その解明に少なからず寄与するものである。特に双生児法による研究は、心因論に対して遺伝生物学的に疾患を究明する有力な方法である。同時に、成因論の解明のみならず双生児相互の発達上の差や、養育環境上の差の影響、あるいは治療法、治療内容の差の症児に与える影響などの研究は、有効な治療法を確立するうえで重要である。

本稿においては、成因論は今後の問題として検討することにし、心理療法、とりわけ遊戯療法を中心とした治療的かかわりの経過について若干の考察を加えたい。

治療は3年間にわたっているが、特に最初の1年間についてはintensiveにかかわったので、この経過を詳述し、後の2年間は治療経過と集団生活での経過を中心にして述べたい。

2 双生自閉児に関する従来の研究の概観

双生自閉児に関する文献は、Rimland, B. (1964) が14例をまとめたものがあり、その後、平井(1970)がまとめた17例が報告されている。17例の内容は、1卵性が14例、2卵性が1例、卵性不明が2例であり、男児が圧倒的多数を占めている。そのほとんどは、事例報告と成因論の考察を中心とした研究で、治療について述べているのは、Scherwin, A.C. (1953), Lehman, E., Haber, J., Lesser, S.R. (1957), Vaillant, G.E. (1963) の3例である。

Scherwin, A.C.は、3才の1卵性双生児に対する音楽療法の経過について報告している。Aは、1才半頃から音楽に興味をもちフォークソングや田園交響曲のメロディーをくり返し、ラジオやレコードの音楽に興味が強かった。Bは、音楽への興味はAより乏しかったが、ジングルベルなどリズミカルな曲を好んだ。治療は1週間に1回のセッションで8カ月間続けられ、同一治療室で行

われた。治療経過のなかで、Aは音階を正確に歌ったが、不安を示した時は音程が高くなり体をゆする動作が観察された。よく知っている曲を歌う時は微笑し、人との関係を示す微笑が観察された。歌はメロディーだけで歌詞を使用することはなかった。

Bは、メロディーの正確さはAより劣っていたがレパートリーは広かった。治療開始時は、体をゆすったり強い不安を示してメロディーを口ずさんだが、数カ月後は治療者も知らない複雑な曲を口ずさんだ。

治療の結果、Aは拒食の減少、人への反応、不安の減少、Bは人への反応、言語による要求の意思表示、食物摂取の進歩、などが観察され音楽療法の効果を述べている。

Lehman, E. et al.は、1卵性双生児を含む10名に対するreserpine投与の結果を報告している。双生児については、その一方のみに投与され比較検討された。その結果、Malamud, W., Sands, S. L. (1947) の精神医学的評定尺度で評定5(重度障害)から評定4(中度障害)に変化し、言語を使用しないレベルでのコミュニケーションが増大した。

しかし、reserpine投与の効果について、行動の変化は、薬物効果か、自然発達か、あるいは心理療法の効果なのか、という疑問が提示され薬物効果の印象を受けるしながらも、心理療法の影響を症児がよりよく受け入れられるよう側面的に援助していることも考えられるとし、薬物治療の問題点を指摘している。

Vaillant, G.E.は、1卵性男児について、家庭と施設に分離して治療が行われた事例について報告した。

症児は、母親による環境からの感覚刺激と愛情を剥奪され乳児院で生活したが、その後一方は家庭に引取られ他方は残された。施設に残された症児は、常同行動、自傷行動が観察され、12才の時には病院へ入院した。排泄訓練はなされたが言語は獲得しなかった。15才の時は、おしゃべり、常同行動があり、見知らぬ人の手のにおいをかぎ、体を前後にゆする行動が観察された。家庭に引取られた一方は、言語を獲得し知能は正常で経過は良く、学校適応も特に問題はなかった。

本事例では、1卵性双生児で素質的には同一でも、環境によって差の生じることが詳細に述べられている。

さらに、病院、特殊学校などの治療に触れているの

1) 静岡県西部児童相談所

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

は、 Kallman, F. J., Barrera, S. E., Metzger, H. (1940) Bruch, H. (1959), Ward, T. F. Hoddinott, B. A. (1962), および先述の、 Vaillant, G. E. (1963) の研究である。

Kallman, F. J. et al. は、精神遅滞を伴う小眼球の先天性盲児を報告し、双生児は盲学校で教育を受けたが効果は少なかった、と述べている。Bruch, H. の報告した 1 卵性の黒人男児は、病院での治療の結果、多少人に反応するようになったが、その程度は限られたものであった。また、 Ward, T. F., Hoddinott, B. A. は、 1 卵性の女児について特殊学級で教育を受けた結果、図画や工作については平均以上の能力を示したが、行動異常や言語障害は治療によって改善されなかった、と報告している。さらに、 Vaillant, G. E. は、 2 卵性男児について病院と精神遅滞児のための養護学校で治療を受けた結果を報告している。病院へ入院した A は、分離不安や行動異常はなかったが、言語発達遅滞があり偶然言語が出る程度で相手のことばは理解したが終日無言であった。一方、養護学校で治療を受けた B は、言語発達遅滞が認められたが、注意力は保持され、人の模倣があり、他児と遊ぶようになった。本例では、母親の、特に A に対する強制的な食事や排泄訓練など A B への差別的養育態度が、 A の症状を一層激しくしていることを指摘している。

以上その他、事例検討、成因論を中心に考察したものとしては、 Backwin, H. (1959), Eisenberg, L., Kanner, L. (1956), Chapman, A. H. (1957), Keeler, W. R. (1958), Chapman, A. H. (1960), Keeler, W. R. (1960) の研究がある。

Keeler, W. R. (1957), Kamp, L. N. J. (1964) の報告は、いづれも 1 卵性の一方のみが自閉症児であり、特に後者は、双生児間の役割行動の差による相互作用の影響について述べている。

また、 Polan, C. G., Spencer, B. L. (1959) の報告は 1 卵性男児について自閉症候群と類似の他の症候群とを評価するためのチェックリストが検討されている。わが国では、いまだ、事例研究として、詳細に検討されたものはみあたらない。

3 問題の所在と研究の目的

双生児法による人間の知能の発達や人格形成の研究については、遺伝と環境のはたす役割と、それに伴う問題の解明に多くの貢献をしてきたが、双生自閉児の場合もその例外ではない。

しかし、双生自閉児の研究は、その概観で述べたように事例研究と成因論の検討がほとんどであるが、事例が極めて稀であるために成因論の解明に至っていないのが現状である。なかでも、 Eisenberg, L., Kanner, L. は、その成因論のなかで、家族、とりわけ両親の養育における

情緒的冷たさ (emotional refrigeration) を強調する事例や、 Vaillant, G. E. の事例における母親の症児への感覚刺戟と愛情の剥奪、それに伴う無視的態度の影響、 Keeler, W. R. や Kamp, L. N. J. の 1 卵性の一方のみが自閉症児である場合、その成因論は明確に述べられていないが、母親の子どもを顧みない養育態度や、双生児の一方が活発で片方が不活発である場合などの双生児間の役割行動や心理的な相互作用の影響が考察されている。 1 卵性双生児で素質的には同一でも、その状態像は必ずしも同一でないことなどから、自閉症の双生児研究では今なお成因論の解明に至っていないのが現状である、と考えられる。

また、双生自閉児の治療を考える時、双生児という特殊性を考慮する必要があるか否かを問題にしなければならない。すなわち、双生児を単一児として施設、病院などへ分離し、あるいはまた、各々独立した場面へ分離して治療を行う治療形態をとるか、双生児として同一の家庭、施設、病院、あるいは同一治療場面で治療を行う形態をとるかという治療の方法論上の問題がある。先に述べた Vaillant, G. E. の研究は、施設と家庭に分離して治療が行われた。これに対して、 Scherwin, A. C. の音楽療法は、家庭では分離され特別の養育者が雇われ、治療場面では分離されなかった。

また、 Lehman, E. et al. による薬物治療は、双生児の一方を統制し効果を比較した点で双生児法の伝統的な研究方法であるが、これは治療の効果測定の観点から双生児を対象としたもので双生児の治療という観点から検討すれば、双生児を各々単一児と同様に薬物治療を行うなかで効果を比較検討することも可能である、と考えられる。

このようしたことから、双生自閉児の治療経過についての研究は少なく、また、双生児という特殊性に意味をもたせて治療が行われた研究は極めて少ない。さらに、治療方法、治療形態についても方法論上明確でない、と考えられる。

以上のことから、双生自閉児の事例研究においては、その成因論の解明もさることながら 1 卵性双生児という遺伝生物学的基盤が同一である、という特殊性と双生児間の行動上の共通性や相互作用などを治療上に考慮することも重要なことである、と考えられる。

したがって、本研究では、一卵性双生自閉児への治療と、その経過を中心とした研究を行うものである。

4 方 法

(1) 自閉性障害の本態が解明されず治療の有効な方法が確立されていない現在、現象としての行動を詳細に観察すると同時に、場面設定や条件操作などを行い、そ

れに対する反応を観察することによって治療の糸口を見出す、という接近方法をとった。これは、基本的には遊戯療法による全人格の発達という観点に立ちながら、条件を与えたり、場面や環境を操作することによって興味や関心のありかを探り、顕現化されていない心的メカニズムをとらえていくものである。

さらに、治療は条件や場面設定、環境操作、課題などを積極的に与えるなかで興味や関心の拡大をはかり、その内容と反応様式などを基本にして次の治療段階の方針を決定していく方法をとる。

(2) 双生児という特殊性を考えた時、治療形態として先に述べたように双生児を分離して治療を行うか、同時にうかの問題がある。自閉児は、最初の徵候として言語発達遅滞に気づかれることが多いが、その発達過程は、発達の認められない状態から良好な発達を示す状態まで巾広い。特に双生児の言語発達については諸説があるが、A.P. ルーリヤ (1956・1957) は、双生児は言語発達が遅れる傾向があること、そしてそれは、素質による場合と「双生児的状況」による場合であることを指摘している。そして、言語発達遅滞の要因は「双生児相互が互いにあまりにも緊密な実践的結びつきをもっており、共同の実践活動の過程で理解しあうので、言語コミュニケーションをしなければならないような客観的状況におかれることが他の子にくらべて少ない」と述べ、さらに加えて、「双生児同志と一緒にくらすときの独得の生活形態『双生児的状況』は、言語コミュニケーションを必要とする客観的条件をつくりださずに、言語発達における遅滞を固定させる。その結果、十分な言語能力に直接依存する心理活動もまたすべて未発達になるにちがいない」と述べている。

この問題については、天羽 (1971) の双生児研究においても双生児は意思疎通がよいこと、一緒に過ごすために同じような経験をもっているので多くの言語を使用しなくとも意思の伝達の役目をはたしてしまうために、言語発達遅滞を招くことを指摘している。

しかし、このことは、知的発達や情緒発達が正常な場合であって、自閉児の場合に適用できるか否かは疑問であるが、少なくとも今後の治療の方向を示す指標として検討しなければならない問題である。

したがって、「双生児的状況」が双生自閉児の言語発達に影響を与えると仮定するならば、その治療の方針論において、双生児は分離し双生児特有の言語発達を遅らせている相互のコミュニケーションシステムを変えていくことが必要である、と考えられる。

しかし、本例の場合、後に述べるように初診時は表面的にはほとんど相互交渉はないが、母親を媒介としてかなり意識しあっていることが母親の観察と遊戯室での観

察で明確となっている。母親を中心とした2人の動きからは、双生児相互が環境から孤立し、周囲を無視しているようみえるが、相互にかなり意識しあっていることを示している。これは、双生児ならずとも単一の自閉児においても観察されていることである。

このようなことから、言語発達のみを治療目標とするのではなく、全人格的発達を目標とするならば、双生児相互の顕現化されていない相互作用を、行動レベルまで引きあげることを治療目標に置くことが治療上有効であろう、という仮説をたてることもできる。この「双生児的状況」は、双生児の言語発達遅滞の要因としての仮説であるが、本例の場合は、言語発達遅滞のみが問題ではなく、基礎にある自閉性が問題であるために「双生児的状況」の解決だけが治療目標とならない。

以上の観点から、双生児は、当面分離せず同一条件、同一環境のもとで並行して治療を行う形態をとった。

(3) 治療は遊戯室のみに限定せず、経過や状況によって屋外でも行われ、また、系統立てた治療とするために家庭での指導も重視し、母親へのカウンセリングを行った。

(4) 治療は、開始時より極力回数を多くし、時間を長くした。少なくとも1週間に2回、2時間用意してintensive なかわりをした。

5 事例の生育史

R.S., K.S. 女児 初診時：3才5ヶ月

(1) 家族構成

父親：33才 母親：28才 本児らを含め4人家族、両親は健康で精神疾患などの遺伝負因はない。

(2) 妊娠中の状況

昭和41年3月結婚、結婚と同時に北海道へ転勤となる。気温の変化により倦怠感を訴え受診したが、特に異常は指摘されなかった。血液型は父親がB型、母親は

表1 妊娠中の経過

検診日	子宮底	腹围	血圧	浮腫	尿蛋白	児心音	体重
42・3・31	異常なし		116/60	(-)			46.kg
5・1	"		110/40	(-)			46.5 "
5・27	"		90/50				48.2 "
6・27	245	78	120/76	(-)	(-)	(+)	50.5 "
7・26	265	82	104/50	(±)	(-)	(+)	52.6 "
8・25	275	865	118/72	(-)	(-)	(+)	53.5 "
9・8	325	87	128/80	(-)	(-)	(+)	53.9 "
9・20	32	87	94/60	(-)	(-)	(+)	
10・5	35	92	96/70	(-)	(-)	(+)	
10・16	36	92	100/70	(-)	(-)	(+)	双胎

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

A B型 (RH(+)) であった。

妊娠5カ月で流産した。本児妊娠3カ月の時、盲腸の手術をしたが経過は良好であった。

妊娠中の経過は表1に示すとおりである。

(3) 出生時、および出生後の経過

経過については表2に示すとおりである。

表2 出生時及び出生後の経過

	A	B
乳児期		
産 声	弱々しく、あまり泣かなかった。	Aよりやや元気よく、泣き声も大きかった。
生下時体重	2450g	2740g
栄 養	人工栄養	人工栄養
哺 乳 力	弱く少量	弱く少量
3カ月微笑	あり	あり
定 首	3カ月	3カ月
生 歯	5カ月	9カ月
8カ月不安	あり	あり
後 追 い	あり	あり
離 乳	離乳食を多く食べなかつたため失敗。	Aと同様
便 の 状 況	少量で青色をし、消化不良のようであった。受診したが異常は認められなかつた。	Aと同様
疾 病	2カ月の時、足を組んで寝ていたことから股関節脱臼を発見、4カ月間入院治療、8カ月の時にギブスをはづした。	3カ月の時、Aと同様に股関節脱臼を発見、11カ月までギブスをつけた。直後、再び4カ月間ギブスをつけ経過はAよりわるかった。 ほとんど寝ている状態が続いたため、睡眠状態はわるく終日不気嫌であった。
睡 眠 の 状 態	ギブスの影響か眠りが浅く、特に明け方にはよく泣いた。	
幼 時 期		
始 歩	1才6カ月	1才11カ月
始 語	1才2カ月の時、ママ、ダダが観察されたが、以後発達しない。1才の時、同年の義妹の子どもが単語を話はじめていたのに、アーアーしか言えず、言語発達の遅滞に気がついた。しかし、動作が緩慢なので、いづれ話すだろうと楽観していた。3才4カ月頃、アカ、イヤを話はじめた。	A同様に、言語発達遅滞に気づいていたが、楽観していた。2才になっても言語は全然発せられていなかった。3才4カ月頃から、アカ、イヤ、アオのことばが出はじめた。
疾 病	1才の時、原因不明の発達が3日間続いた。かぜにはよく罹患したが短期間で治癒した。しかし、生後2年間はよく発達した。	よく発熱しかぜと診断されることが多かった。症状はAより重く、長期間の治療が必要であった。
夜 驚	2才6カ月まで時々あった。	2才8カ月まであり、Aより多かった。
夢 中 遊 行	1才6カ月から2才にかけてあり、また夜中に眼をさましばんやりしていることがあった。	2才過ぎまで時々あった。
行動特徴と異常の確信	2才5カ月の時、外へ出しても活発でなく、友だちとも遊ぼうとせず、周囲に無関心で自分勝手な行動が顕著であった。遊びはまとまりがなく隅で1人で遊んでいた。特に音楽に興味があったわけではないが、テレビをよく見ており寝かせておけばいつまでも寝ており、全般におとなしかった。	Aと同様に、音楽に特に興味があったわけではないが、テレビをよく見ており寝かせておけばいつまでも寝ており、全般におとなしかった。 2才過ぎてもことばがなく、家庭に対しても無関心で外へ出しても友だちと遊ぼうとせず、周囲に無関心で自分勝手な行動が多く、遊びはまとまりがなかった。ABの相互の交渉もなく隅の方で1人で遊んでいるのをみて；その異常性に確信を抱くようになった。

(4) 全般的な発達の比較

全般的な発達は、A・Bとも遅れていたが、どちらかといえばAよりBが遅れていた。発熱、股関節脱臼の治療についてもBが長期間を要した。股関節脱臼の治療

経過などの影響のためか、始歩はAよりBが5ヵ月遅れたうえ、A・Bともに睡眠障害があり、その程度もBの方が重かった。

6 初診時の状態像

A・Bとも外観上はほとんど同じ状態像で、容貌もよく似ており区別をつけ難いが、共通して言語発達遅滞と対人関係における無関心、環境からの引きこもり、固執性が顕著であり、感情の表出に乏しく、両親とのコミュニケーションはほとんどない。A・B相互の交渉はなく互

(1) 全般的な状態像

表3 初診時の状態像

	A	B
対人関係		
母親との接触の状況	<ul style="list-style-type: none"> 就寝時、母親がBの方を向いて寝ていると、母親の耳を引っぱり自分の方へ向かせる。 遊戯室で母親に絵を書いてもらっている時、赤色のクレヨンをBが取ったのを見て泣き、取り返すことを要求する。 母親に対して、欲求が満たされない時、妨害された時に感情を爆発させ、母親を支配しようとする。しかし、母親からの働きかけにはほとんど反応しない。母親の顔を見ない。 	<ul style="list-style-type: none"> 母親への接觸はほとんどない。Aが母親を独占しているのでBは母親に近寄れない。しかしAが母親から離れるとすばやく母親に近づき、Aが再び母親に近づくとBは離れる。母親をとりあうことはない。 母親が近所の子どもやAを相手にしても無関心である。母親へのあまえはなく、分離不安感もなく、また、母親の顔を見つめることもない。 <p>Aと同様</p>
父親との接触の状況	父親との情緒的コンタクトに乏しく、一緒に入浴することを嫌う。	Aと同様の傾向があるが、Aより少ない。
治療者との接触の状況	目的物を取る時、その対象へ治療者(T)の手をもっていったり、すばやく膝や肩へ乗って近づこうとする。見知らぬ人、偶然、近くにいた人にも同様で、手や膝は誰れのでもよく、欲求充足のため人を物体、道具のように扱う。Tからの働きかけには反応がない。	Aへの直接交渉はなく、母親をとおしてのAへの意思表現もない。
A・Bの相互交渉	Bへの直接交渉はないが、上述のように時として母親をとおしてBへの意見を表現する。	
対物関係		
興味・関心	<ul style="list-style-type: none"> テレビの子ども番組をよく見る。音に対して無関心であるが、聞きなれたコマーシャルがはじまるとテレビの前へきて見ていている。 母親に特定の絵(後述)を書くことを強迫的に要求している。 水遊びに興味を示し、パウダーや空かんをいつも手にしている。 	<ul style="list-style-type: none"> テレビの子ども番組をよく見る。 特定のものに対する興味や関心はみられないが、比較的、水遊びと赤い色のついたもの(例えは赤色のクレヨンや赤い花など)に興味がある。 初診時には、ビニール製の犬の玩具を持っていることが多かった。
知的能力		
記憶力	初診以来、3回会い、以後Bの股関節脱臼の再手術のため治療を中断し、2ヵ月後に訪問したが、その時同行の職員に接近せずTに抱かれてきた。	聞きなれたコマーシャルがはじまるとテレビの前へきて見ており、時々、コマーシャルソングを口ずさんでいることがある。

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

理解力	禁止は理解されず、指示に従うことも不可能。	Aと同様。
遊び	1人遊びで母親が添にいないと遊ばない。家中では母親に絵を書くことを要求したり、絵文字積木を並べたりしている。	母親がいなくても屋外で過ごせる。近所の家の階段(外側)に坐ったり、砂いじりをして過ごすが、注意していないと迷子となる。
運動能力		
遊具の使用など	ブランコ、スペリ台、階段の昇降は可能で高い所へ登ることを好む。しかし、股関節脱臼の影響か内反足気味で健常児程には走れず、飛びはねるような走りかたをする。 三輪車は与えていないので乗れない。	ブランコ、スペリ台はできず、階段の昇降も1段づつ足を運ぶ程度である。Aと同様に股関節脱臼の影響か内反足気味で健常児のように走れない。 三輪車は与えてないので乗れない。
利き手	右利き	左利き
言語発達		
語彙	意味ある言語は、アカ、イヤのみで偶発的。	意味ある言語は、アカ、アオ、イヤ、ママ、だけであるが、偶発的で発声も極めて少ない。
意思表現	アーアーが多く、時々動作で表現する場合がある。絵を書くことを要求する時もアーアーで表現する。	意思表現はAより乏しく動作による表現もほとんどみられない。
感情特性		
よろこび	あやしてもよろこぶ表情をみせない。	Aと同様
いかり	周囲に対して無関心であるが、欲求が受け入れられない時、妨害された時にはパニック状態を示す。	周囲に対して無関心で、興味や欲求が阻止されても反応がなく、その場から離れてしまう。
恐怖心	自動車が対向してきても避けようとせず、高いところへも登っていく。	多少理解できるよう対向してくる自動車を避けようしたり、暗闇を恐れることがある。 動作にも表現することはない。
寒暖の感覚	暖かい感覚、暑い感覚は多少理解でき、衣服を脱ぐ動作を示すことが時としてみられる。	
嫉妬心	母親がBや近所の子どもを相手にしていても無関心で、母親をとりあうことはない。	Aと同様
全般的特性	感情の表出に乏しく眼にかがやきが少ない。 Tが抱いて体をくすぐっても反応がない。抱いたり肩車をすると笑顔をみせる時があるが、健常児の笑顔の表情と異なる。抱きあげてもTの方を向いておらず体を適応させようとしない。 抱く時も木が倒れてくるような感じで体を寄せるなど協応の欠如がみられる。	感情の表出に乏しく眼にかがやきが少ない。感覚は敏感でなく、周囲に対する関心は乏しく、耳もとで大声を出したり、太鼓をたたいたりしても反応を示さない。体をくすぐっても、抱いたり肩車をしても表情を示さない。抱いても体を適応させることもなく、Tの方も向いていないなど協応の欠如がみられる。
習癖		
指しゃぶり	眠りに入る前にみられたが、3才になってからは両手の親指をしゃぶるようになった。	乳児期に時々みられたが、初診時ではない。
生活習慣		
食事	箸の使用は不可能。スプーンの使用は可能。	Aと同様。
排泄	動作によるサインは出ているが、尿と便の区別はなく、母親でないと理解できない。昼間もらすことはないが、サインを見落すともらすことがある。夜尿はない。	Aと同様に動作によるサインは出ているが、尿と便の区別はなく、母親でないと理解が不可能である。昼間もらすことないが、サインを見落すともらすことある。夜尿はない。
着脱衣	着衣はほとんどできないが、帽子はかぶることができる。脱衣は簡単なものなら可能である。しかし十分でない。靴ははける。	Aと同様。
偏食	肉類を好み、牛乳、タマゴ、菓子類などのあま	パン、アメ、菓子類などあまいものを好み、や

行動特性	いものを嫌う。	さい、くだものはほとんど食べない。
固執性	<ul style="list-style-type: none"> NHK午前10時の番組「おかあさんといっしょ」に出演している「うたのおねえさん」が歌いながら書く「コックさん」の絵を母親に終日書かせている。その「コックさん」にはボタンが3個ついているが、絵には必ず3個書かないとパニックを起こし大声で泣き喚く。これは偶然母親が書いて与えたのが動機で興味を示したものである。(写真1) 母親が買物に連れて出る時、同じ道を通ることを要求する。 新らしい服を着用することに抵抗があり、いつも着ている青色のズボンに固執している。 絵文字積木の絵の方を上にして箱へ入れることに固執し、文字を上にして入れるとパニックを起こし大声で泣く。 	<ul style="list-style-type: none"> 母親が買物に連れて出る時、同じ道を通ることを要求する。 絵文字積木で遊ぶ時、Aとは反対に文字を上にして箱へ入れる。 <p>Aと異なり新しい衣服の着用に対する固執性はなく、同一性保持への固執性は全般的にAより弱い傾向にある。</p>
環境認知	自分の持ちもの、興味や関心のあるものの置き場所についての認識はない。目的物を得るために道具の使用もない。	Aと同様に自分の持ちもの、興味や関心のあるものの置き場所についての認識はない。目的物を得るために道具の使用もない。
視線	初診時のやや前から合うようになったが、瞬間的に相手を凝視することはない。しかし、一点をみつめる行動があり、Aの眼の位置より上方40度位の空間を顔をやや右に傾け眼球を左側へ寄せて左上方をみつめる行動がある。	Aと同時期から合うようになったが、瞬間的に相手を凝視することはない。 Aにみられた、いわゆる横目現象は観察されない。
E E G 印 象	正常 子どもらしくかわいらしい感じであるが、表情に乏しく動きは緩慢である。	正常 Aと同様。

以上のように、ABともに自閉の程度は重いと考えられ、母親のことばによれば「毎日ぼんやり過ごしているだけ」という状態である。感情の表出、対人・対物関係における無関心と引きこもりは、その程度においてAよりBの方が重いが、同一性保持への固執性はAが強い傾向にある。ABともに知的能力の高さを示す徴候は観察されず、コミュニケーションとしての言語はほとんど表出されていない。対人・対物関係、母親を中心とするABの動き、同一性保持への固執性、メロディーへの関心と記憶、運動能力、感情の表出、利き手、偏食、習癖、横目現象、などにABにおける若干の差が認められた。

また、頭型では、AよりBの方がやや後頭部が突出している程度の差がある。

母子関係の動きは、3才4カ月まではBが母親に接近していたが、以後急に母親から離れAが接近した。

(2) 精神発達検査による比較

3才8カ月時における津守・磯部(1965)の乳幼児精神発達診断法による検査結果は図1に示すとおりで

ある。全般的な発達傾向はほぼ同一であるが、運動能力と排泄におけるサインの正確さについてAが比較的良好である。

(3) 両親の生育歴と人間関係

父親：5人兄弟の第3子として出生、C国立大学経済学部を卒業し大手企業の営業部門を担当し、対人関係は積極的で仕事も敏速である。妻とは、1年間の交際後恋愛結婚した。性格は明朗で人に好かれ、知的水準は高い。

母親：8人姉妹の末子として出生、高等学校卒業後、現夫の勤める会社に就職した。結婚の動機は、自分が無口で非社交的な性格であり、また、子どもは好きでなかったので、自分の性格とは反対の性格の人を希望し夫を選んだ。

外へ出ることを好まず、人と話すことは得意でない。

子どもがうまれた時は、特に感激はなかった。双生児がうまれたために2人を同時に育てられるか、という不安感が強かった。北海道の気候に適応できず体調不良で

一卵性双生自閉児の発達に関する一例研究

あったことと、子どもが好きでなかったことに加えて股関節脱臼のため医師から背負わないよう注意されていました。ABに対して抱いたりあやしたりすることが少なかった。ミルクも機械的に与え終るとすぐ寝かせるなど、スキンシップは少なく、またおとなしく寝ていたので抱きあげることも少なかった。さらに、母親は無口のため話しかけることも少なかった。成長するにしたがって、ABは外へ出ようとしたが、母親の性格が反映して家のなかで終日テレビをみて過ごすことがほとんどの日課であった。

ABがうまれた時、両親は同じように2人を育てるのが困難であり、遊び相手も十分できないので、あまやかなようにし、抱かない方針をたてた。

母親は、戸締りを何回も確認したり、手紙をポストに入れる時、うまく入ったかどうか気になる、などやや強迫的な傾向がある。

ABを育てるうえで、両親のABに対する態度に差はない。

父親の帰宅は、仕事の関係ではなくて毎日遅く、夫婦間の会話も少ない。子どものしつけについての話しあいもなく、母親は家庭における父親として、また夫としての役割行動に対する不満を抱いている。

7 卵性診断

国立遺伝学研究所 松永 英博士による卵性診断結果のデータは表4に示すとおりであり、ABは、99.9%の確率で1卵性双生児と決定された。

検査以外の所見では、指紋の紋型についてAは10指ともに小指側に流れる蹄状紋、Bは右第4指が渦状紋、残り9本はAと同じ蹄状紋である。

掌紋の手式 (Cumminsによる) では、

A 左: 7・5''・5'・3-t-O-O-O-O-L
右: 11・9・7・3-t-L'・O-O-O-L'・O

B 左: 11・9・7・3-t-L'・O-O-O-L'・O
右: 11・9・7・3-t-L'・O-O-O-L'・O

となり、ABでは多少異なるが、右はほとんど同じである。左の違いは、同一人の左右の違いと同程度である。

なお、顔、耳などの形態からも1卵性とみなされる、という診断結果であった。

ABO血液型は、ABとともにA型であった。

8 治療の方針

治療は、第1期から第5期までに分けられる。第1期から第3期までの1年間は個人治療の期間であり、第

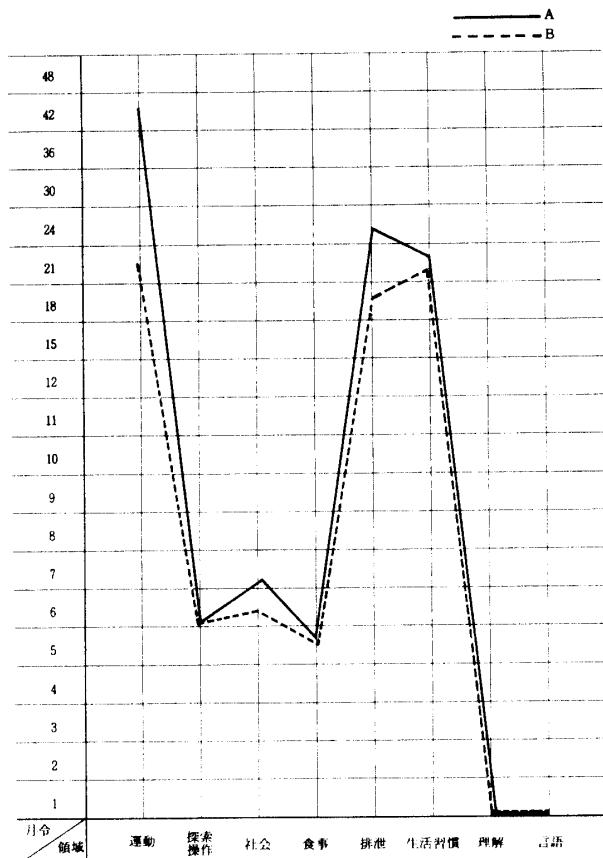


図1 乳幼児精神発達診断検査プロフィール

4期と第5期の2年間は、集団内での指導と個人治療との併用の期間である。各期には、治療目標と治療方針がたてられ、児童の状況によって進行した。

各期における具体的な治療方針は次のとおりである。

<第1期>

治療にはいるまでの数回の観察や母親の報告から、具体的に次のような当面の治療方針をたてた。

(1) 遊戯室への適応をはかるために母子同室で治療を行う。これは、以前に治療を受けた機関での遊戯室への適応が十分でなかった、という母親の報告にもとづくものである。

(2) 経過により段階的に母子分離をはかる。母子同室での経過を観察し、最終的には母子分離をはかりTと児童との関係のなかで治療を進める。

(3) 興味や関心の拡大をはかることによって固執性を軽減させる。Aは、特に母親に同一パターンの絵を書かせる固執性が強いため、同一の絵のみ書いて与えるのではなく、児童の身近にある事物の絵や、生活経験を豊富にさせ新しい場面で少こしても興味や関心を示したもの絵に表現して与える。遊びについては、多くの遊具を与えるなかで興味を示すものを探索する。

表4 卵性診断の検査結果(昭和48年4月2日)

(国立遺伝研究所)

遺伝形質の種類	A	B	両人が二卵性の 事前確率……… 0.3534	両人が一卵性の 事前確率……… 0.6466
			二卵性のときの一一致率	一卵性のときの一一致率
1. 性	♀	♀	0.50	1.00
血液型				
2. ABO	A	A	0.6502	1.00
3. MNSS	N _s	N _s	0.5304	1.00
4. Rh	R ₁ R ₁	R ₁ R ₁	0.6389	1.00
5. Q	Q	Q	0.6846	1.00
血清型				
6. Haptoglobin	2-2	2-2	0.7718	1.00
赤血球酵素				
7. Acid phosphatase	B	B	0.7980	1.00
8. Phosphoglucomutase	1	1	0.7896	1.00
9. Phosphohexose isomerase	1	1	0.9889	1.00
10. b-Phosphogluconate dehydrogenase	A	A	0.9148	1.00
11. Adenosine deaminase	1	1	0.9743	1.00
12. Isocitrate dehydrogenase	1	1		
染色体多型				
染色体番号	1	c c	0.7772	1.00
	3	F F	0.5625	1.00
	4	f f	0.7489	1.00
	13	F f	0.6243	1.00
	14	f f	0.8880	1.00
	15	f f	0.9809	1.00
	16	c c	0.9746	1.00
	21	f f	0.8699	1.00
	22	F f	0.5434	1.00
		累積	0.00094	0.64660

$$A B \text{が一卵性の確率} = \frac{0.6466}{0.6466 + 0.00094} = 0.999$$

(注) 染色体多型の記号で C C : C band 法によって、相同染色体の 2 本の着糸点近傍が薄く染っているもの

F f : Q band 法で、相同の 1 本の着糸点近傍が強く蛍光を発し、他の 1 本は弱いもの

f f : Q band 法で、相同の 2 本がともに蛍光の弱いもの

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

Bは動作が緩慢で反応に乏しく、単純な動作のくり返ししかしないために、多くの遊具を与え興味や関心を示すものを発見する。

(4) 母親へのカウンセリングを行う。家庭では、身体接觸を多くし、溺愛的態度をとり、生活経験と言語刺戟を豊富にする。

<第2期>

第1期において、遊戯室への適応が可能となり、母子分離も短時間可能となった。また、ABの相互交渉が遊びの場面で僅かに観察されるようになった。

このようなことから、次の段階として、以下の治療方針をたてた。

(1) 母子分離を完全なものにする。これは、急に分離するのではなく段階的に行い、Tとの関係へ移行するために受容的態度を基本とする。

(2) 遊戯室や屋外での興味や関心の拡大をはかる。

児童に興味や関心のある玩具を中心とした受容的接近から、Aに対しては、描画を積極的に導入し、同時に玩具による遊びへ発展させる。描画は、生活領域を広げ、動物や草花の観察、豊富な遊具などを与え生活経験を豊富にさせ、児童が興味や関心を示した事物を絵に表現して与える。さらに、絵に表現したものを持ち抜いたり、また同じものを色紙で製作したり、折ったりするなど興味を発展させる。Bに対しては、基本的にはAと同様の方法をとりながら、描画には興味を示さないので遊具を使用する遊びの拡大をはかる。

(3) ABの相互交渉を積極的に操作する。双生児は、通例、同一の服装をさせる傾向がありABも例外ではなかった。これは、わが国に限らず世界的にも共通の慣習のようである。先に述べた Kallman, F.J. et al. の例では、その写真によれば同一の服装をさせている。同一の服装をすることは、A.R. ルーリヤの「双生児的状況」を促進することであり、特に双生自閉児にとって適当でない、と考えられる。

このようなことから、ABには、色、デザインなど異なった暇装をさせるよう指示し、ABを各々独立した個人として相互に認識するよう配慮した。このことが、ひいては相互に意識しあい、その意識が行動レベルまで引きあげられるのではないか、と仮定した。

さらに、治療場面では、第1期において丸テーブルを2個用意したが、第2期では1個にしABの接近を促進し相互交渉が可能なるよう環境整備をする。

(4) 第1期と同様に母親に対するカウンセリングを行う。

<第3期>

第2期において、母子分離により母親を媒介とした受容的治療から、Tを中心とした受容的治療へと移行された。その経過のなかで、興味や関心が拡大されABの相互交渉も観察されるようになったため、児童の興味や関心の拡大を治療の重点としながらも治療者中心による課題操作的治療をも若干加えていくことが、治療をよりseveveなものにするのではないか、と考えるに至った。

また、ABの示す興味や関心に差が生じ、それに伴い必然的に治療内容に差が生じたので、治療者としてAB各自に治療方針を立てる必要があった。

このようなことから、次の具体的治療方針をたてた。

(1) 母子分離した状況下でTとの関係を中心に治療を行う。また、児童の興味や関心の対象の内容をさらに理解し、これを基礎に発展させる。そのために、第2期と同様に、条件や場面設定を積極的に行う。さらに言語刺戟を豊富にしながらABの相互交渉を促すための場面操作を行い、同時にTとの関係から発展させるために他児を治療場面に加え観察する。

Aについては、基本的には描画、折り紙、切り抜きなどを導入しながら固執性を軽減するために、描画を意図的に操作する。同時に型はめ、パズルボックス、キーボックス、ピクチャーパズル、粘土、絵本など動作的課題を導入しながら遊具への興味も拡大させる。

Bについては、経過はAより不良であったが遅れながらAの後を追っておりクレヨンにも興味を示しはじめたので遊具による遊びの拡大を中心としながらも、描画活動への導入をはかる。また、とかく反応の多いAに治療の重点がおかれるがちであるので、Bに対しても積極的に接触する。さらにA同様に動作的課題を導入する。

<第4期>

第4期は、保育園で指導を受けた1年間である。第3期までの1年間でABの相互交渉が行動面に現われ、他児への関心も観察されるようになり、さらにTとのコミュニケーションも僅かながら良好となり、言語も急速に発達した。このような経過から、治療を家庭、治療場面だけに限定せず、全人格的発達への促進を目標に児童の指導の中心を集団内（保育園の同一クラス）におき、Tは治療のかかわりを持続しながらも側面的援助の立場をとった。

<第5期>

保育園生活2年目の1年間である。この期は、言語発達、興味や関心の拡大、生活習慣や運動能力の進歩、感情表現の豊かさ、模倣行動の増大と固執性の軽減など基本的な問題が僅かであるが解決されつつある時、ABの相互交渉やTと家族だけの関係に停滞せず、また、児

童の集団生活での適応状況などから判断して、A Bは同一保育園の同一クラスにとどまらず、分離して別々の保育園で指導する方針がとられた。

9 治療の経過

<第1期> (治療回数 1回目～8回目)

(1) 全般的な経過

全般的な経過についての概要は表5に示すとおりである

表5 第1期の治療経過

	A	B
対人関係		
母親との接觸の状況	母親と密着し「コックさん」の絵を書かせることに固執する。短時間の母子分離が可能となる。	股関節脱臼の再手術のため入院して以来、母親と密着するが、母親への固執性はない。短時間の母子分離がAと同時期に可能となる。
Tへの接觸の状況	水遊びを中心としてかかわりはじめたが、母親のところと水遊び場を往復し単調な遊びであるが、TとBとの水遊びに関心を示し接近する。	水遊びに導入するが1人遊びで、Tの働きかけには反応がない。
対物関係		
興味・関心	砂場へ誘導して遊具を与えたが、屋外では、スベリ台、ブランコなどに誘導した。その結果、ビー玉、電話器、鉛筆、ブランコ、小石、などに興味を示はじめた。動物園では、動物を眺めている場面が観察されるようになった。児童の関心を示したものを見表現する経過のなかで、母親に要求する絵が「コックさん」からヒマワリの絵に転じた。	多くの遊具を与えるなかで、僅かに人形と風車に興味を示し、水遊びには比較的短時間で興味を示した。しかし、遊びは単調であった。生活経験を豊富にするためにAと同様、動物園やデパート、公園などへ連れ出しが興味や関心を示すものではなく、ほとんど無関心であった。
知的能力		
描画	描画はできず、遊びもまとまりがなく、知的能力の高さを示す徴候は観察されなかった。	Aと同様。
遊び		
運動能力		
遊具の使用など	スベリ台でよくすべるようになった。	ブランコはのれない。スベリ台が可能となる。
言語発達		
語彙	治療場面で、アカ、ファンタのタ、カメのメ、オシッコのコ、ミカンのカン、ヒマワリのマ、が観察された。	治療場面では、言語は観察されず、発声量もAより少ない。
意思表現		
感情特性		
いかり	「コックさん」の絵と同様に「ヒマワリ」の絵にも固執し、書かないとパニックを起こす。遊具に他児と一緒に乗せた時、笑顔を見せた。	水遊び場でAに遊具をとられても、体をくすぐっても表情に変化がない。
生活習慣		
排泄	尿意を「コー」と言語表現した。	動作で表現するが母親でないと判断できない。
行動特性		
固執性	「コックさん」の絵から「ヒマワリ」の絵に固執し、妨害されるとパニックを起こす。物をとるに人の手を使用することが多かった。	動きは緩慢で、妨害されても反応はなく、その場から去る。行動にまとまりがない。水で服がぬれるといつまでもこすっていたり、足の指に砂が入ると細かく砂を取り除く。
同一性保持		

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

A B 相互交渉	Bの水遊び場面でAが突然Bの持っている器をとり、Bがとり返す場面が観察された。Aは再びとり返さなかった。Bが母親から離れると母親に接近する。Bの行動をよくみていることが観察された。	Aが母親から離れると母親に接近する。Aの行動をよくみていることが観察された。
----------	--	--

(1) 考 察

① A B が交互に母親に密着した状態のなかで、母親を媒介とした受容的治療と、動きが少なく興味や関心が極めて限定されていた児童の状況とを治療の糸口として、治療場面の設定や、刺戟、条件を多く与えることによって興味や関心の対象を探り、それを手がかりに行動範囲や興味・関心の拡大をはかった。このことが、母子分離へ移行させ遊戯室への適応を可能にした、と考えられる。

なお、母子分離は、治療をできるだけ系統的なものとする意図から試みたものである。

② 約4カ月余の治療経過のなかで、A B の、母親やTへの接近のしかた、興味や関心の対象、記憶、感情の表出のしかた、言語などに差異が観察された。

これは、治療のウエイトが比較的反応の多いAにおかれしたことによる、と考えられる。

③ 母親を中心とする動きのなかで、A B は相互に意識しあっていることが、初診時の状況も含めて明確となり、それは、治療が進行するにしたがって僅かながら動作に表現されるようになってきた。

このことは、今後の治療を考えるうえで、方法論上さらに検討しなければならない課題である、と同時にこの相互作用を治療に利用することがTとの1対1の関係におけるより、より児童に好ましい状態をもたらす、と予想される。

④ 児童らが、僅かであるが変化の徵候を示したことは、治療的かわりのなかでもたらされた生活領域や生活経験の変化が背景にあったことが要因として考えられる。さらに、母親への個別カウンセリングにより児童への指導に積極的になってきたことも要因として考えられる。

<第2期> (9回目~20回目)

(1) 全般的な経過

全般的な経過については表6のとおりである。

表6 第2期の治療経過

	A	B
対人関係		
母親との接觸の状況	母子分離が可能となる。	母子分離が可能となる。
他児との接觸の状況	同年令児5名のなかへ入れても無関心で、その場から離れてしまう。	Aと同様。
Tとの接觸の状況	Tの模倣（セルロイド球への棒さし）が観察された。	身体的接觸を求めることが多くなり、排尿を訴えた。Aと同様の模倣が観察された。
対物関係		
興味・関心	遊戯室では、ビー玉、セルロイド球への棒さしやBブロックに、屋外では小石あつめなど比較的小さいものに興味を示した。児童の要求する絵は、全面的にその要求に応ずる段階、一方的に画一的な絵を与える段階から、動物園の見学や草花の観察、遊具や折り紙、絵の切り抜きなど多くの経験や場面を与えるなかで、児童が僅かに示す関心を糸口に興味を発展させた。その結果、動物ではダチョウに、草花ではヒマワリやコスモスに、遊具ではナイロン製のテントや虫やムーミンに興味を示した。	水遊びは比較的長時間続けたが単純な動作のくり返しであった。砂遊びでは中へ入らず外側で器へ砂を入れる単純な動作を示した。Tが意図して砂場中央へスプーンを置くと、砂場へはいりスプーンを取り、スプーンで砂をすくい口へもっていく動作を示した。このような動作をくり返すなかで、砂、シャベル、スプーン、器などを使用した、多少まとまりのある砂遊びに発展した。さらに、セルロイド球への棒さしによるTの模倣、人形遊び、など多少の行動範囲の拡大と興味・関心の拡大が観察された。

知的能力 描画・遊びなど	<p>クレヨンでなぐり書きをはじめ、やがてダチョウやヒマワリ、テントウ虫の絵が書けるようになった。(写真2) 描画は、騒画の時期から色の重ね塗りの時期を経過して、正確な絵に発展した。描画において特徴的なことは、ダチョウの絵に眼を記入することを強調したことであった。それは、色紙で折ったヤッコや円形に切り抜いた色紙にも強調した。この時、さらに特徴的なことは、ダチョウの絵を書いた時に足と足の間に1本の垂直線を引き「コシャー」(オシッコシャーの意味)と表現した。(写真3)</p> <p>このような経過で、治療場面ではじめてかなりまとまった人間の顔と全身像の絵を書いた。(写真4) 以後、ヤッコに鼻、口を記入することに発展した。また、遊戯室の外にとまつた焼いも屋のピーという音に一瞬描画の手を休めて行こうとした。さらに、オヤツの置き場所を記憶していたり、こだわりを示していた「コックさん」やクジラの絵を書きはじめたり、かなり以前に買って与えた菓子を要求する、など古い記憶や経験を再現する傾向が観察された。</p>	<p>また、遊戯室が暗くなった時、電気をつけると「アッ」と声を出し見上げる、など部屋全体への関心が示された。</p> <p>治療場面で若干の興味や関心の拡がりが観察されるようになったが、経過のなかで経験した人形遊びが家庭にも般化し、2才の頃に与えた人形を探し出して抱いたり、就寝時にふとんのかへ持ちこんだりする記憶の再生と情緒表現が観察された。</p> <p>また、治療場面でTが汽車に乗り汽笛を鳴らすと見ているが接近しようとしている。しかし、Tが汽車から離れるとすばやく汽車にまたがってTと同じように汽笛を鳴らして部屋を走りまわるようになった。</p> <p>このように、遊びへの参加が僅かであるが観察され動作も活動性が増大した。同時に、クレヨンにも興味を示し箱から出して並べたり、巻紙を破るなどの動作が観察された。</p> <p>家庭においては、畳や机の上に水をこぼした時、その上へ紙をのせて隠そうとする行動が観察された。これは、母親が一時、情緒的に混乱し叱責することが多かったため、母親の叱責を恐れての行動、すなわち、児童にとっては防衛的行動ではないか、と推測された。</p> <p>セルロイド球への棒さしと、それを指先で回転させたり、クレヨンを箱へ並べたり、小さなスプーンで砂をすくい器へ入れる、など手先の器用さが観察された。</p>
運動能力 手先の器用さ	<p>ビー玉を並ぶたり、セルロイド球への棒さし、ブロックつなぎ、折り紙など手先は器用であった。また、クレヨンの操作が巧みとなり、短時間で多くの絵を書くようになった。</p> <p>三輪車に乗れるようになった。</p>	
言語発達 語数 意思表現	<p>治療場面と家庭での観察結果から、不明瞭なのも含めて30の単語が数えられた。これらは、児童に興味のある事物や絵、食物に関するものが大部分で自分の意思を伝達する手段として使用された。しかし、一方的である場合が多く、コミュニケーション言語としては使用されること少なかった。</p>	<p>治療場面と家庭での観察結果から、不明瞭なのも含めて18の単語が観察された。</p> <p>内容については、Aと同様であった。</p>
感情特性 いかり	<p>欲求が阻止された時のパニックはやや減少し、屋外での遊びの時は大声で笑うなど、表情は多少豊かとなった。</p>	<p>身体接觸をすると、表情が多少豊かとなり、治療場面での人形遊びが家庭での遊びに般化し、人形への愛情表現が観察された。</p>
生活習慣 排泄	<p>排尿を訴える時、パンツを腰までさげるようになった。</p>	<p>排尿を訴える時、Tの手をとりズボンをさげることを要求し、「シッコ」と言語で表現するようになった。</p>

一卵性双生自閉児の発達に関する事例研究

行動特性		
固執性 同一性保持 模倣	<p>描画に対する興味は拡大されたが、Tや母親に書かせる段階では書き順、色、型は一定し、そのパターンをくずすとパニックを起こした。しかし、第1期で観察されたようなはげしいパニックは減少し、その程度に変化がみられた。</p> <p>また、児童の絵は画一的なものであったが、Tや母親の書いた絵を模倣することが可能となってきた。模倣は絵のみならず輪投げなど、他の行動にも出現した。</p>	<p>単純なくくり返し動作から、砂遊びで観察されたように多少まとまりのある遊びが可能となってきた。さらに、セルロイド球への棒さしにみられるように、Tの模倣も多少可能となった。</p> <p>しかし、行動範囲は限定され、動作は緩慢であった。欲求が阻止されてもパニックは起こさず、その場面から去ることが多かった。</p>
A B 相互交渉	<p>TとAが交渉中にBがAに接近し、BはAとの数回の色紙のとりあいの後、その場面から去った。この時、Tが色紙やシロフォンの棒を与えたが、Aがシロフォンの棒に関心をもちBに接近してとりあう場面が観察された。</p>	<p>TとAの交渉や、製作物に興味を示し接近してきた。この時、治療場面ではじめて色紙のとりあいが観察された。Bは色紙をAにとられたのでTが手渡そうとするとその場から離れた。30分位経過した後、再びBがAに接近しTとAの交渉を眺め、Bは再度Aの色紙をとり数回のとりあいが観察された。Bは積極的にAに接近するが、とりあいでは負けることが多かった</p>

(2) 考察

① A Bに対する治療方針は基本的には同じであるが、具体的治療内容には差が出てきた。Aに対しては描画を中心とし、折り紙、切り抜き、遊具での遊びなどによる接近をし、Bに対しては全身的な活動や遊びの内容の拡大、行動範囲の拡大といったものが中心となった。しかし、反応はAの方が多かったため、とかくAに治療のウエイトがおかれる結果となったことは否定できない。このことが、さらにA Bの行動上の差となって現われてきたものと考えられる。

② Aに対する描画中心の治療の結果、その変化に伴い意思疎通、興味・関心の拡大、言語発達など、若干の変化が認められた。特に描画においては、Tや母親に書くことを要求していた段階から児童自身が書くことができるようになった。その描画は極めてステレオタイプであったが、Tが書いて与える時は、クレヨンをTに手渡すことを要求したり、指定した色のクレヨンを手渡すよう要求するなど、クレヨンを媒介として少しだけコミュニケーションを取るような方法が講じられた。また、児童自身が書く場合も、画一的な変化のない描画に固執していたので、それを切り抜いたり、同一のものを色紙で製作して与えたり、さらに折り紙を使用するなど、興味の拡大をはかった。

しかし、Tとの関係では、描画、折り紙、切り抜きなど児童の興味を示す限られた範囲でしか意思疎通ができず、それも大部分は、児童からの一方的働きかけであった。

以上のような経過ではあったが、同一性保持への固執

性と、それに伴うパニックは暫次減少する傾向が観察され、表情も若干の変化をみせた。

③ Bは遊戯室全体への関心が向けられ、TとAとの関係をよく観察しており、それは、第1期では母親を媒介として表現されていたが、第2期では物をとりあう、という行動レベルまで発展してきたことは望ましい結果と考えられる。

④ Aの描画過程における眼の強調と人間像の出現については、全体把握のための部分への関心の現われと、ものを人間的に認知しはじめたことを意味すること、そして同時に治療者をも人間的に認知しはじめていることを示している、と考えられる。

さらに、眼の強調は、外界に対する関心の広がりと外界を受け入れ、そして人への関心のはじまりを現わしている、とも考えられる。ただ、人間像における耳の脱落は、いまなお聴覚的に外界を遮断し、周囲への関心の乏しさを示している、と考えられる。Aの視覚（眼）をとおして獲得されたものは、描画にかなり多様に表現されるようになったが、聴覚（耳）をとおして獲得されたものは、ことばに若干の変化が認められたが描画程の好転的な変化ではなかった。

しかし、治療開始後219日目に観察された焼いも屋に対する行動は、音に対する関心を示したことと、描画と同時に動く2つの心的変化をも示している。と考えられる。

また、ダチョウの絵における「コシャー」の表現は、排尿への執着を示すものと考えられ、Erikson, E. H.

(1967) の発達段階を適用するならば、児童の精神社会的モダリティは保持一放出の段階で、内部的に保持と放出を本人なりに操作していることを示している、と考えられる。

⑤若干の言語発達が観察されたが、この時点では、生活環境を整え、生活経験や言語刺戟を豊富にし、さらに条件を与えることによって興味や関心を引き出し、それについてTは言語を伴わせて非言語的動作で表現し、それを児童が動作で模倣する、という過程を経るなかで児童の興味・関心の対象と名称とがつながり、言語化され、結果的にはTや家族と限られた範囲で、しかも一方的であるがコミュニケーションが可能となってきた、と

考えられる。

⑥A Bの相互交渉が、同一テーブルへ接近し遊具をとりあうという型で出現し、これはBからの接近ではじまつた。このことは、相手を1人の人間として認知はじめた証拠であり、各々の意思を相手に表現するという意味で相互によい結果をもたらしている、と考えることができる。

また、相手の行動様式を自分にとり入れる模倣行動がBに多く現われたり、人形遊びにおけるBの記憶の再生と情緒発達を示す行動は、正常な発達過程を児童なりにたどっている、と考えられる。

<第3期> (21回目~34回目)

(1) 全般的な経過

全般的な経過については表7のとおりである。

表7 第3期の治療経過

	A	B
対人関係 Tとの接触の状況	児童からの描画、折り紙、切り抜き、遊びなどの要求を受容していくなかで、抱かれるなどの身体接触を求める動作が多くなった。	TとAとの交渉に関心を示し、同一テーブルへ接近してくる回数が多くなり、同時にTの手を引っぱるなど、Tへの直接行動が多くなった。 TとAとの交渉の模倣が、Aと同じようにTに絵を書くことを言語で要求するよう変化した。 Aと同様他児を参加させた結果、前者に対しては直接の交渉はなかったが、その遊びを眺めている場面が観察された。後者に対しては、ドルハウスで遊んでいても接近しようとしているが、女児がドルハウスから離れるときには、ドルハウスに近づき、内をのぞいたり戸を開閉する動作が観察された。しかし、直接の交渉場面は観察されなかった。
他児との接觸の状況	4才の男児と6才の女児を別々に治療場面に参加させ観察した。前者の場合、ほとんど関心を示さなかった。後者の場合、女児がドルハウスで遊んでいるのをしばらく眺めた後、接近しドルハウスに触れた。言語でのコミュニケーションは女児から働きかけても反応しなかった。しかし、女児の遊びには興味を示し、その場から離れようとした。	描画をTに要求する段階から、なぐりがきをする段階に発展した。型はめ、パズルボックス、キーボックス、ピクチャーパズル、絵文字積木、絵本、折り紙、砂遊び、クマのぬいぐるみ、などへの興味の拡大がみられた。折り紙は、自分で折れないが、Tに折る種類を多く求めた。
対物関係 興味・関心	描画をはじめ、型はめ、パズルボックス、キーボックス、ピクチャーパズル、絵文字積木、絵本、折り紙、砂遊び、クマのぬいぐるみ、などへの興味の拡大がみられた。折り紙は、自分で折れないが、Tに折る種類を多く求めた。	描画をTに要求する段階から、なぐりがきをする段階に発展した。型はめ、パズルボックス、キーボックス、ピクチャーパズル、水遊び、砂遊び、絵文字積木、電話器、絵本、粘土などへの興味が観察された。
知的能力 描画・遊びなど	描画は、Tや母親が書いて与えたとおりの絵が固定し、それが固執性へと発展する傾向があった。ヒマワリやダチョウの絵は典型的で書き順や色の使用のしかたはたえず一定していた。この固執性を軽減させるために、治療場面では、意図して書き順や色を違えて書いて与えた。その結果、最初はパニックを起こしていたが、一	描画活動へ導入をはかったところ、最初は児童自身書けなかったが、治療開始270日目に黒板やドアになぐりがきをはじめた。Bの要求によりムーミンの絵を書いて与えると、Aの場合と同様に眼の強調を要求し、以後、食パン、焼いも、ブドウパン、ヨーカンなど、言語による描画の要求が多くなった。ムーミンの絵は、T

一卵性双生自閉児の発達に関する事例研究

<p>色で書いたり、また数種類の色を使って描画するなど固執性は軽減し変化に富む絵が書けるようになった。</p> <p>このように、描画に変化が現われると、ダチョウの絵の「コシャー」が消失はじめた。</p> <p>このような経過をたどり、絵は第2期に観察されたヒマワリ、コスモス、テントウ虫、人間像などから、そのレパートリーは拡大し、コックさん、花、ヨーカン、サクランボ、まんじゅう、ぶどう、ポンポンガム、チューリップ、皿にのったケーキなど、児童の身近かなものの絵へと発展した。</p> <p>描画の内容が豊富になると同時に、書きかたにも変化が観察され、絵が重なりあうようになり、線画から色を塗る絵へと変化し、さらに、1枚の画用紙に書く絵の数が多くなり、色の使用も多様化した。</p> <p>描画は絵が上手になったことにも意義があるが、むしろ、レパートリーが拡大することによってコミュニケーションの増大、感情・情緒の表現、そして、お茶を見て「キイロ」といい、続けて「ヒマワリ」といい、お茶の黄色とヒマワリの黄色を関連づけて連想するなど、色から連想する事物の言語表現など派生的にその変化が拡大された。</p> <p>折り紙では、ヤッコから舟、金魚、かぶとに変化した程度であったが、色紙の使用は切り抜いたりヒマワリを製作するなど変化を与えたところ興味を示し、絵としてのヒマワリから製作したヒマワリへと興味を転換させた。これに伴いハサミで切ることに興味を示し、Tが切ることに協力（ハサミを上下から押す）する態度が現われた。児童は、ハサミの使用はできなかつたが、描画という平面的なものから折り紙や切り抜き、色紙製作という立体的なものへと興味を転じさせた。切り抜きは、単一な事物だけではなく、複数の相互に関連した事物を切り抜くことによって、それを使用しての現実的な遊びへと発展した。このようなTとの関係が言語を媒介としてなされるようになった。</p> <p>さらに、紙による製作から粘土を導入してのより立体的な事物への興味の拡大をはかった。</p> <p>自分で製作することはできなかつたが、Tの作るダチョウやヒマワリ、他の事物に興味を示した。</p> <p>型はめ、パズルボックス、キーボックス、ピクチャーパズルは、この順序で毎回治療場面へ</p>	<p>が意図して眼を記入しないとBが記入した。</p> <p>描画は、言語でTに要求する段階から絵に適合した色のクレヨンをTに渡しながら絵の内容に注文をつける段階へと発展した。例えば、ブドウパンの絵を書いた時、Bが黒色のクレヨンを手渡すのでその意味がよく理解できなかつたが、それはブドウパンの中に「ブドウ」を書くことを要求しているのであった。</p> <p>さらに、絵を切り抜いたり、色紙で製作したりすると興味を抱き感情表現も豊かとなってきた。しかし、Aに比較すると興味の向けかたは弱かっただ。</p> <p>このように、描画を中心とするTとAとの関係をよく観察しており、Aと同様のことをTに要求し、Aを追う型で経過した。</p> <p>遊びの場面では、水遊び、砂遊びなどから電話器、絵本、クレヨンによるなぐりがきへと変化した。電話器は耳にあて、絵本は内容には興味を示さないが持ち歩いた。</p> <p>型はめ、パズルボックス、キーボックス、ピクチャーパズルはAより興味を示し、治療場面で毎回導入した結果、Aより短期で完成した。</p> <p>水遊び場面では、水を止めるとTの手をコックのところへもっていき、水を出すことを要求した。止めたり出したりをくり返した後、「水を出すの」と質問すると「ミズ」と反応する。さらに数回くり返した後、「なに出すの」と質問すると「ミズ」と反応するようになった。以後、水遊び場面では水を出す時は言語で表現するようになった。</p> <p>Aが手にした粘土に関心を示したので、Tが児童の興味あるヨーカンを作り紙で包んで与えると、頭上にもちあげ「タカーラ」と低い声で言語表現した。</p> <p>要求する絵の名称が言語で表現できない時には、それに関連ある言語で表現した。例えば、ヨーカンの絵を要求した時、「アマイ」で表現し、「なにがあまいの」と質問すると、すぐに「サトウ」と表現し、続けて「ヨーカン」と表現した。この時、TははじめてBがヨーカンの絵を要求していることが理解できた。</p> <p>このように、「アマイ」、「サトウ」、「ヨーカン」が共通していることを理解し、それを言語で表現した。</p> <p>さらに、空に浮かぶ雲を見て「ワタメ」（綿あめの意味）と表現し、雲が綿あめのように感じて表現したようで、児童にしか理解できない</p>
---	--

	<p>導入し、第3期終了時には完成した。</p> <p>絵文字積木を与え、絵をとおして意思疎通をはかることを目的としたが、積木として遊びの場面で使用され、児童は、この積木を組合せてヒマワリの型をつくったり、Tを模倣して高く積み上げるなどの模倣行動が観察された。</p> <p>このように、描画の内容の変化と、それに伴う関連した遊びへと横の拡がりに発展し、自閉性と固執性が僅かながら軽減すると同時に、Tや家族とのコミュニケーションが増大した。</p> <p>また記憶の再生が観察され、「コックさん」の絵が画用紙に書けるようになった。具体的な事物と名称を興味あるものを中心に教えると、比較的はやく記憶するなど、これまでの描画内容や行動から知的水準の正常さを示唆する行動特徴が観察されるようになった。</p> <p>特に変化はない。</p>	<p>言語の使用が観察された。</p> <p>瞬間的な記憶は比較的良好のよう、テレビではほとんど見ていないにもかかわらず突然、「カメンライダー」ということばが発せられたり、車中で聞いた駅弁の呼び声「ベントウ」が記憶されていたことも観察された。</p> <p>また、遊戯室の外にとまつた焼いも屋の音に関心を向けるなど、遊戯室外の環境への全体的認知も観察された。「メルモちゃん」のメロディーを口ずさんだ。</p> <p>治療開始時は、目的物をとる場合、Tの手を使用したり体を駆け登るなどの行動がみられたが、第3期終了頃には、目的物に手が届かない時には、椅子を使用するなど、目的のために道具を使用することが可能となった。</p> <p>特に変化はない。</p>
運動能力 言語発達		Aと同様に言語発達は著しく、数えきれないくらいの量が観察された。しかし、大部分は名詞であり、若干の二語文が含まれていた。言語のほとんどは、児童の身近にある事物の名称であり、児童の意思伝達機能として表現された。
語 数 意思表現		しかし、児童からの一方的な発語である場合多かった。
感情特性		
いかり 笑い 嫉妬心	<p>欲求が阻止されてもパニックを起こすことが少なくなった。Tが椅子に腰かけた状態で砂場へ転落したのをみて声を出して笑ったり、TがBを相手にしていると気嫌がわるくなり泣きはじめるなど、嫉妬心らしきものが観察されるようになった。(家庭でも同様であった。)</p> <p>母親は、最近、Aの眼が生き生きとし表情が豊かになり顔がしまってきた、との感想をもらした。</p>	<p>Aと異なり、「大きい」「高い」が治療場面で、「うるさい」が家庭で観察された。</p> <p>特に「うるさい」は、母親の実家に帰省した時、家庭や子どもたちのなかへ入れようとした時に突然発せられた。</p>
生活習慣 行動特性	<p>特に変化はない。</p>	Tの関心をひくような動作があり、Aを相手にしていると泣き、Bを相手にすると泣きやむ、といったことが教回観察され、嫉妬心らしきものが観察され感情表現が豊かになってきた。
固執性 同一性保持 模倣	<p>上記のように固執性は軽減される傾向であり、Tや家族の模倣が観察された。</p>	家庭でも同様で、母親の顔をよく見るようになり、特に夜は眼をよくみつめていることがあり、A同様に最近は表情が豊かとなり、顔がしまってきた、との感想をもらした。
A B相互交渉	<p>粘土や菓子のとりあいが第2期より頻繁に観察された。また、その時間も長くなった。</p>	<p>特に変化はない。</p> <p>特に固執性は観察されなかった。</p> <p>TとAの交渉をよく観察し、同様のことをTに要求するようになり、そのためにはAのテーブルへ接近する頻度が多くなった。</p> <p>Aと同様</p>

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

(2) 考 察

①治療はAの方がTに対する反応が多かったことから、第1期、第2期と同様に、どちらかといえばAに重点がおかれて進行したことは否定できない。したがって、BはAの経過を追う型で発達した。AはAの興味や関心の拡大によって暫次Tとのラポートがつき、自閉性と固執性が若干軽減され、時に言語発達が顕著に認められた。BはAより当初、興味や関心は拡大されなかつたが、遊具による遊びの拡大と、AとTとの交渉の模倣によって、むしろA以上の行動の広がりを見せながら発達した。

②描画においては、色の重ね塗りから絵の重ね書きへと変化したことは、全般的な変化とあわせて考える時、意味ある徵候と考えられ発達を示す指標として考えてよいのかも知れない。

また、ダチョウの絵における「コシャー」の消失は、先に述べたErikson, E. H. の発達段階、保持一放出の段階を終え次の段階へ発達しているのかも知れない。治療における描画の役割は、描画をとおしてのコミュニケーションがはかられたと同時に、心的メカニズムを理解するうえでの情報を提供した、といえる。

③児童が積極的には興味を示さなかった型はめなどの課題作業は、多くの型から同型のもの、あるいは、同型で色の異なるものの選択という、型の認知や、ピクチャーパズルのように部分から全体、全体から部分を洞察する力を求めるものである。このような、児童にとって興味の少なかった課題を媒介としての意見疎通をはかることも治療内容の経過から必要であり、有効であったと考えられる。

④言語の急速な出現は、言語刺戟を与えたことによって獲得されたものと、すでに獲得されていたであろうものが、自閉性障害によってその表出が妨害されていた、という2つの側面から考えなければならない。言語発達は、言語のみならず行動面でも環境に対して無関心のようでありながら強い関心を示していることが観察されておりのことから、人や環境への関心と同時に言語も獲得されていたものもあり、自閉性と固執性が軽減され、環境への関心や興味の拡大と、それに伴う人とのコミュニケーションの増大によって、この2つの側面が相互に機能しながら言語が表出してきた、と考えてよいのかも知れない。

さらに、言語発達の要因として、Tや家族が児童に直接言語刺戟を与えると同時に、児童が僅かでも興味や関心を示したものを見や製作物に表出し、これが児童により以上の興味をもたせる結果となり、それに対してさらに言語化して与えたことが事物と名称との結びつきを強

め不明確だった理解言語が、より明確になったことも考えられる。

言語は、事物の名称としての表出だけでなく、表出した言語と関連のある事物への関心と、それに関する言語表出へと発展した。単なる言語獲得、あるいは事物と言語とを関連させるだけでなく、表出した言語に関連ある事物を連想し、それをさらに言語化する、という複雑な心的メカニズムが働いていることが観察された。言語のないことが自閉性を深め、動作、課題遂行、模倣、描画など非言語的な手がかりで自閉性、固執性を軽減させることによって言語を獲得し、これがさらに動作、課題、模倣、描画、人への反応も容易にし、自閉性と固執性がなお一層軽減され感情・情緒が豊かになっていく、という段階を経過している。

⑤素質的には同一でも状態像は必ずしも同一でないことは文献でも指摘されているところであるが、本事例の場合も例外ではない。治療によって、さらに差が生じたことは、今後の治療の有効性と必要性を示しているものといえる。

⑥A Bの相互交渉は、すでに述べた段階的経過をたどり直接交渉をするという行動レベルまで引きあげられた。そこに言語が介在することは少なかったが、児童相互が意思を相手に発動したという点で意味があり、相互に人間として認知していることを示し、これが相互の発達にとって好ましい結果をもたらした。「双生児的状況」が児童の発達に好ましくない影響を与えることが指摘されているが、これは、治療場面や環境操作により、分離しなくとも相互に好ましい影響を与えることにもなる、ということを示唆している。特に、嫉妬心を泣くことで表現しTを独占しようとする動き、その後の表情の豊かさなど、感情・情緒面での変化や模倣行動などの観点から、「双生児的状況」の有効な利用が治療に必要である。

⑦A Bとも治療場面に参加した児童に対して、直接の相互交渉は観察されなかったが、関心を示し、その関心を動作で表現した。このことは、他児への関心を示し仲間集団への適応の糸口を示すものと考えられる。治療経過のなかで人に対する働きかけは観察されたが、それは人を機械的、道具的扱いで欲求充足のための手段としての行動であって、感情の流れは感じられなかった。

しかし、第3期の、治療場面でのTや他児への関心の向けかたは異なり、いわゆる人に対する関心の向けかたであった。

⑧第1期から第3期までの僅か1年間での好転的変化の要因として、④児童へのintensiveな場面操作や課題などによる興味、関心の拡大を中心とする治療プロ

グラムの遂行、⑥A B並行による相互交渉を目的とした治療場面の構成と、それに伴う模倣行動の発達、⑦家族の積極的な協力、をあげることができる。児童の興味や

関心の広がりと深みを系統的に発展させていくために、家族との細部にわたる連絡とカウンセリングが必要である。

＜第4期＞（35回目～60回目）

(1) 全般的な経過

全般的な経過については表8のとおりである。

表8 第4期の治療経過

	A	B
対人関係		
Tとの接触の状況	意思を言語で表現することが多くなった。	Aと同様
対物関係		
興味・関心	アイウエオ・マスター器に興味をもち文字を憶えるようになった。描画、粘土に興味が強い。	描画、折り紙、絵本、絵文字積木に興味が強くなってきた。
知的能力		
描画・遊び	描画での変化はないが、文字に興味をもち、アイウエオ・マスター器で指示した文字を押すことが可能となった。新聞で、「日本」「日興証券」の読みかたを教えたらすぐ憶え、他に教えない漢字も読むことができるようになった。 また、粘土でダチョウ（写真5）やヒマワリを上手に製作するようになり、はじめて画用紙に「ようかん」と書いた。	保育園で憶えた「七夕さん」「ヒマワリ」「夏はいいな」の歌をうたうようになり、以前に増してコマーシャルを口ずさむようになった。 また、絵文字積木の文字をみて、裏側の絵を50全部を言いあてることが可能となった。 描画では、なぐり書きに命名するようになった。なかでも、やや正確なトンボの絵が書けるようになった。（写真6）
運動能力		
遊具の使用	アイウエオ・マスター器を、器用に使用した。	ブランコが可能となり、物干竿にぶら下った。
言語発達		
語 数	花に興味が強くなり、花の名前をよく言うようになった。語いが増加し、二語文も可能で「ピンクノダチョウサン」など助詞が若干使用されるように変化した。	指の名称が言えるようになった。促されれば、「オハヨウ」が言え、「テオアラウ」「ツメタイ」など助詞、形容詞が増加し、二語文が頻繁に観察されるようになった。
意 思 表 現		
感情特性		
感 情 表 現	「アツイ」と言って服をもち上げ、暑い感覚を言語を伴わせた行動に表現した。	水道の水に触れて「ツメタイ」、物干竿にぶら下って「タカイ」と表現し、場面に応じた感情を言語に表現した。
生活習慣		
食 事	箸の使用が可能となり、治療場面で排尿を「オシッコ」、排便を「ウンチ」と表現した。	箸の使用は不完全。排泄については変化がみられなかった。
排 泄		
行動特性		
固 執 性	ダチョウの絵や文字を書く時、あるいは色紙でヤッコ、舟などを折る時にピンク色を好む傾向が観察されるようになった。しかし、固執性の印象はなかった。	家で与えたオムスピと保育園で与えられたオムスピと、のりの巻きかたが異なったため、「チガウ」といって食べなかったことがある。
同一性保持		
A B 相互交渉	自分のことを「Aちゃん」、Bのことを「Bちゃん」と呼ぶようになり、Bの世話をやくことが多なくなった。Bに靴の片方を遊戯室の隅から	Aに対して、「ピロビタン」「ユビワ」「トケイ」「ヨーカン」など言語を使用して絵を書くことを要求し、Aはそれに応じる、という場面

一卵性双生自閉児の発達に関する一事例研究

保育園での適応の状況	<p>探し出して与えたり、帰り際に帽子をかぶせるなどの姉的な役割行動が観察された。</p> <p>家庭でも、就寝時に「Bちゃんパジャマ」といって着換えを要求したり、エプロンをつけて与えるなどの行動が頻繁に観察された。</p> <p>入園1カ月で母子分離が可能となったが、園庭で過ごすことが多かった。保母への身体接触が多く、あまえが観察されたが、言語によるコミュニケーションは少なく、他児との相互交渉も少なかった。しかし、6カ月を経過した頃、他児とともにブロックを組立てたり、つないだりする動作が観察され、心理的には遊びに参加しているようであった。</p>	<p>が観察されるようになった。</p> <p>Aと同時に母子分離をした。園庭で過ごすことが多かったが、給食やおやつの時間に呼びかけると入室し着席するなど、Aより適応は良好であった。保母への身体接触が多かったが、他児のなかへは入らず保育室の隅で遊びを傍観していることが多かった。</p>

(2) 考 察

① Aにおいては、興味・関心はさらに拡大され、文字に興味をもつようになったことと、Bに対する姉的な役割行動が出現してきたことが特徴であった。Bにおいても同時に文字に興味をもちはじめ、特に言語発達には著しいものがあり知的水準を示す徵候が観察されるようになった。

② 集団生活においては、仲間関係ではBよりAが若干適応状態は良く、他児との遊びにも参加できるようになった。しかし、Bは仲間関係より保母との関係の方がむしろ良好であった。

また、食事、排泄などの基本的生活習慣が確立されたことは、集団保育の効果であろう、と考えられる。

しかし、個人治療場面に比較して集団生活では、言語反応に乏しいことが観察され、今後の集団場面での指導が検討されなければならない。

③ Aの第4期終了時は、Erikson, E. H. の発達段階を適用して考察するならば、「遊びの時期」であり心理・社会的モダリティは模倣である。「一のように作る」「一のようにする」という形態をとっている時期である、と考えられる。

<第5期> (61回目～95回目)

(1) 全般的経過

全般的な経過については表9のとおりである。

表9 第5期の治療経過

	A	B
対人関係 両親への接觸の状況	父親の変化により、父親への接觸が多くなる。	第3子出生後、母親は児童を拒否する態度で接した。その影響か、母親に対する反応が減少した。 絵を書くことを言語で要求することが多くなった。
Tへの接觸の状況	治療場面では、文字を入れた描画が多く、コミュニケーションは従前より良好となった。	描画、折り紙、絵本、文字への興味が、従前に増して強くなった。
対物関係 興味・関心	絵から文字、数字へ転換した。同時に水遊びや砂遊びの時間が長くなったり。	描画は、比較的長い時間なぐりがきをするようになった。虹の絵をTに要求した時、虹の色の順序を正確に理解しており、その順序にしたがってクレヨンを手渡した。四角の模写が可能となっただ。
知的能力 描画・文字など	通園中のバスから見た道路標識やバス内の装飾品、あるいは絵本で見た虹など、教えられたものでなく児童自身が経験したものを見として表現するようになり興味や関心の領域が一層拡大された。	

	<p>文字については、自分の名前や家族の名前、平仮名の1部も書けるようになった。動物の絵を見て、その名前を文字に表現した。数字は10まで書いた。</p> <p>ハサミの使用が可能となり、自分で絵を書いて切り抜いた。</p> <p>単調な抑揚のない、かん高い話しかたには変化がなかったが、多くの言語を獲得し単語を4個並べることもあった。</p> <p>この期の特徴として、「ピンク」ということばに興味を示し、ことばの頭にピンクをつけることが多くなった。</p> <p>第3子出生により「デナサイ」と妹を外へ出すことを要求したり、時には妹と一緒に寝ころがって笑いかけることもあった。「Aちゃん、あかちゃん」「だっこして」など母親へのあまえなど一時的な退行現象が観察された。</p> <p>食欲が旺盛となり、排便が自立した。</p> <p>描画のレパートリーは拡大されたが、ピンク色に固執はじめた。ピンク色したものに注意が集中し名詞の上には「ピンク」をつけた。動機は定かでないが、後に消失した。</p> <p>ピンク色の帽子を与えたところ、すぐピンクのパジャマを着た。Bには黄色の帽子を与えたところ「Bちゃん、キイロ、パジャマ」といい、黄色のパジャマを着ることを要求した。</p> <p>また、BがAの顔をひっかくと、Aは「イタイナー」と反応し、Bの爪や顔をみつめていることが観察された。</p> <p>さらに、親威からBよりはやく帰宅した時、Bを探す動作があった。</p> <p>保母への身体接觸は多いが、Aのみ転園以来、児童は孤立しクレヨンでペランダに文字や絵を書いていることが多い。しかし、欲しいものがある時は、保母に訴えることがある。給食場面では、他児と一緒に着席することが可能であった。</p>	<p>また、歌を憶え（2曲）、10までの数唱が可能となつた。</p> <p>ハサミの使用は可能となつたが、型を切り抜くことはできなかつた。</p> <p>単調な話しかたには変化がなかつたが、多くの言語を獲得した。意思表現のために単語を3個くらい並べることもあった。時に願望の動詞が治療場面で5個観察された。歌詞をよく憶え、歌っている場面が観察された。</p> <p>親威へ一時的に預けて以来、表情が豊かとなり相手にしないとかんしゃくを起こすことが多くなつた。保育園では、嘱託医へ身体接觸を求めた。</p> <p>Aと同様</p> <p>第3子出生による母親の拒否的態度により、児童のことばが囁声となり聞きとれなくなつた。これは、5カ月間続いたが、偶然、親威へ預るという環境の変化で改善された。</p> <p>治療場面でも、Aの行動を模倣する動作が從前に増して観察された。</p> <p>母親の報告によると、第3子出生以来、A Bの相互交渉が多くなつた。</p> <p>また、BからAへの交渉が多くなつた、との報告があつた。</p> <p>保母や嘱託医への身体接觸は多かつたが、集団内では孤立していることが多かつた。語いは豊富となつたが、保母や他児との言語によるコミュニケーションは少なかつた。他児と一緒に着席することは少なかつた。</p>
運動能力		
手先の器用さ		
言語発達		
語 数 意見表現		
感情特性		
感 情 表 現		
生活習慣		
食事・排泄		
行動特性		
固 執 性		
反 応 様 式		
A B 相互交渉		
保育園での適応の状況		

(2) 考 察

① Aにおいては、文字の読み書きがさらに進歩し

た。絵から文字への進歩は、児童の記憶や知識、経験を文字に表現することに興味をもちはじめたことを示して

一卵性双生自閉児の発達に関する一例研究

おり、今後の治療の方向を示唆するものである。

②Bにおいては、Aと同様に文字をはじめ歌にも興味をもち、行動領域はかなり拡大された。

しかし、第3子出生に伴う母親の拒否的態度を誘因として児童の反応が後退したこと、また、母子分離により改善されたことは、児童の発達に環境のはたす役割と治療にはたす環境の役割とを考慮しなければならないことを示している、といえよう。

③児童が、与えられたものでなく自ら経験したものを絵に表現したことは、その経過から判断して外界に対する認知機能が行動レベルで始動しはじめていることを示している、と考えられる。

10 NAUDS評定スケールによる治療の経過

丸井ら(1974)によるNAUDS評定スケールを適用した治療経過は、図2、図3に示すとおりである。

Aについては、第1期終了時はL₂(言語伝達機能と病理現象)、C(子ども〔仲間〕との関係)、E_m(感情の理解と関係の連続性)、P・S(同一性の保持)、およびS_t(常同行動)が1段階であり、A₁(自発性とエネルギー)、A₂(目的的行動と統制)、L₁(言語表現様式)、E₁(固さと感情の分化)、E₂(感情の統制と連続性)、E_y(視線)、Ad₁(大人への働きかけと狭さ)およびAd₂(大人からの働きかけに対する反応と狭さ)が2段階であったが、3年が経過した時には、A₁、A₂、E₂、E_m、Ad₂、C、が3段階に、L₁、L₂、E₁、Ad₁、

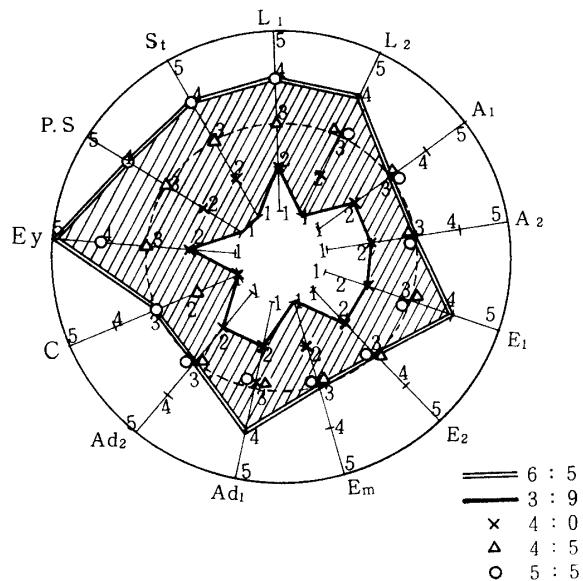


図2 Aの治療・発達プロフィール

11 全般的な治療経過の考察

(1) 治療開始時は、周囲からの極端な孤立と同一性

S_t、P・S、が4段階に、そしてEyが5段階に変化した。

このことから、言語発達は表現様式と伝達機能においてかなり発達したが、行動の全般的なエネルギーは弱かった。対人関係においても、大人への働きかけは変化したが、大人からの働きかけに対する反応と子どもとの関係は発達が遅れた。一定のパターンへのこだわりや単調な動作のくり返しは残っているが、遊びや興味・関心の対象は治療開始時に比較してかなり変化した。

Bについては、第1期終了時はAd₁、Ad₂、Ey、P・Sの2段階を除いてすべて1段階で、行動のエネルギーに乏しく感情・情緒の表出がほとんどみられない状態であり、対人関係で僅かに反応が観察される程度であったが、3年経過後には言語の表現様式と伝達機能、固さと感情の文化、常同行動、同一性の保持はA同様にかなり変化した。しかし、自発的な行動はみられるが、行動のエネルギーは全般に弱く不活発であった。対人関係においても、2段階から3段階に変化した程度で、大人への働きかけや大人からの働きかけに対する反応は比較的良好となったが、その対象はなお狭い。特に子どもとの関係は2段階で集団内での治療のありかたが、今後の問題である。

なお、ABともCを除く他の領域は、治療開始後1年間で3段階に達した。しかし、後の2年間の集団内での変化は、それに比較して発達が遅かった。

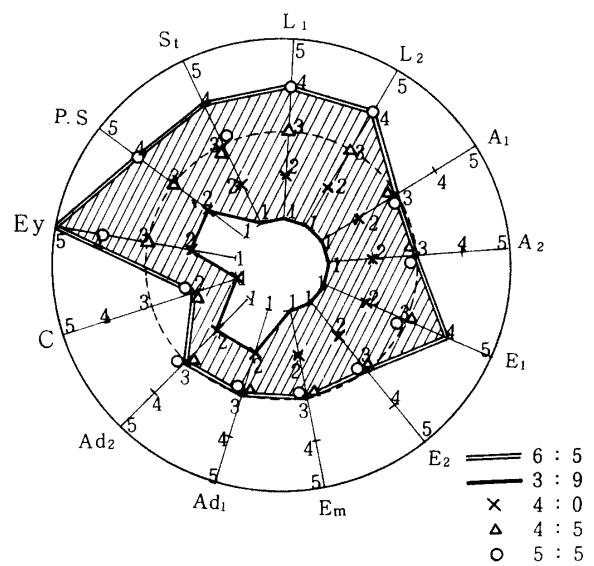


図3 Bの治療・発達プロフィール

保持への固執性、言語発達遅滞が顕著であったが、状態像には若干の差異が認められた。治療の基本は、児童の興味や関心を条件や場面操作を加え、生活経験を豊富に

させるなかで拡大し展開した。特に第1期から第3期までの1年間、intensiveな治療的かかわりのなかで若干の発達を示したが、A Bの治療の方向はむしろ逆の方向であった。Aは描画、折り紙、切り抜きなど、どちらかといえば静的な遊びから遊具を使用する動的な遊びへと展開していった。Bは、水遊び、砂遊びなど動的な遊びからTとAの動作を模倣することにより描画、折り紙、切り抜きなど静的な遊びへと展開した。

Aは、描画 興味をもちTへの働きかけが多く、BはTにも無関心であったことがTや母親を必然的にAに向かせる結果となった。しかし、治療内容は異なってもA Bは相互に相手の行動をとり入れ、模倣と同一視を機能させながら発達した。

言語の発達はA Bとも良好であった。治療開始時には僅か2~4語しかなかった言語が、第3期には急速に出現した。これは単に言語だけが発達したのではなく、興味や関心の拡大、対人関係、生活習慣、運動能力、感情表現、模倣などの好転的な変化、固執性の軽減、A Bの相互交渉など全人格的な発達に伴って出現してきたものであり、その言語の使用も場面に応じたものであった。

治療場面では、TはA Bに対して必ずしも同等量のかかわりをしたとはいえない。むしろ、比較的反応のあったAへのかかわりが多かったことは否定できず、特に描画、製作物においてはBと著しい差がついた。

このような、かかわりかたの差があったにもかかわらずA Bともに言語が著しく発達したのはなにが要因であったのか、という問題がある。

Aについては、すでに述べた経過から判断されるが、Bについてはどのような考察が加えられるであろうか。

治療経過を考察すると次のことが考えられる。

①治療開始前の状態像を比較した時、Aは2語、Bは4語獲得していた。表出言語としてはきわめて少なく、この差は有意とは思われない。しかし、表出されない獲得している言語に差があったのではないか、ということを考えられる。

②Bは、A程固執性が強くなかったために、Aに観察されたような多様な好転的变化がなくとも、TとAとの動作や母親とAとの動作を模倣することによって自閉性をAと同程度に軽減させ、それに伴って言語を獲得し、あるいは表出させた、と考えられる。すなわち、同一性保持への固執性の差の影響も要因の1つではないかと考えられる。

③型はめ、パズルボックスなどの課題遂行作業の成績、音楽や文字、絵本への関心、感情表現、TとAの交渉場面の模倣などは相対的にBが良好であった。Tや母親に要求する絵のレパートリーもBが広かった。

このように、BはAよりむしろ、興味や関心の広がりは良好であり、これらの影響も見逃がせないと考えられる。

④模倣行動については、AがBの動作を模倣することよりBがAの動作を模倣することが相対的に多かった。

また、A Bの相互交渉も治療場面では、Bが積極的に接近するようになった。TとAとの動作をみて、Bが模倣しながら行動に移したというB自身の内的な行動への衝動、意欲が自閉性を軽減し、それに伴い言語刺戟を受け入れ表出を可能にした、と考えられる。

(2) 児童の興味や関心、家族やTへの働きかけ、生活習慣、運動能力、感情・情緒の表出、同一性保持への固執性の軽減、言語発達、A Bの相互交渉など、治療開始前に比較して良好な発達をしながらも集団内では、2年経過してもなお、治療場面や家庭生活で観察される程の言語が表出されず、保母や他児とのコミュニケーションが発達しないのは、今後の集団内での治療のありかたを検討しなければならない問題である。

12 要 約

双生自閉児の事例と治療経過を述べた。状態像は、A Bの行動、自閉性、同一性保持への固執性、興味や関心の対象と程度などに若干の差異が認められたが、行動観察の結果、A B並行による治療を実施した。その治療法は、児童の示す興味や関心を糸口に、基本的には遊戯療法の立場をとりながらも場面設定や環境操作を導入し、変化に応じて治療方針がたてられた。

治療経過は5期にわけられ、第1期から第3期までの1年間は、主として遊戯室における個人治療の期間であり、第4期から第5期までの2年間は集団内での指導と個人治療との併用の時期である。

第1期は、母親を媒介とする受容的治療から母子分離が試みられ、条件や場面を与えながら児童の興味と関心を見出し、それを拡大していく方法がとられた。

第2期は、母子分離が可能となりTとの関係のなかで系統的な治療体制に入った時期である。児童の興味や関心を、より積極的に拡大し、それに伴って固執性を軽減させていく方法がとられた。

また、A Bの相互交渉が可能なるよう場面設定や環境条件の配慮を行なうことが考慮された。

第3期は、第2期と同様の方法をとりながら児童の興味中心の治療から課題遂行治療へと発展させた時期である。同時にA B相互交渉のための環境や場面操作も導入された。

第4期は、児童の状態像から判断して保育園という集

一卵性双生自閉児の発達に関する一例研究

団へ導入した時期である。限定された遊戯室や家庭内の生活から、より広い刺戟の多い集団に入れ、多くの大人や子どものなかで発達を促進させることを目標とした。

第5期は、集団生活2年目にA Bを分離して保育園へ入園させた時期である。これは、言語、興味や関心、生活習慣、運動能力、感情特性、模倣、固執性の軽減などの基本的な問題が多少解決されつつある時、A Bの相互交渉だけに停滞せず、A Bを各自独立した個人として他の児との交渉へ発展させることを目標とした。

この結果、およそ次のことが明らかとなった。

(1) 治療技法は、遊戯療法を基本としながらも条件を与えることや場面設定、環境操作などを導入することによって児童の反応を観察し、行動として顕現化されていない心的メカニズムを理解しながら興味や関心を引き出し、それを糸口として発展させる方法が講じられ、本例の場合にはその有効性が認められた。

(2) 双生児という特殊な状態は、「双生児的状況」という、むしろ言語発達を阻害する要因が機能しているために、双生児は個別に治療を行なうことが有効であると考えられるが、本例の場合は、A Bの相互交渉が母親やTを媒介として観察されたことから、同一場面での並行しての治療が行われた。

結果として、A Bの相互交渉、相互の模倣は増大し、それはA B相互に好ましい結果をもたらした。

したがって、児童の状況によっては並行した治療形態をとり、双生児の相互作用を治療に利用することも有効であることが判明した。

(3) 児童の示す僅かな興味や関心を、深く、広く発展させることによって自閉性と固執性を軽減させ、全人格的発達を促進させたことが言語発達の要因であったと考えられる。

(4) 集団内における変化は、個人治療でみせた程の変化は観察されなかった。特に言語は、語いは豊富になりコミュニケーションとして使用したが、集団の場面では使用されることはない。

このようなことから、集団内における治療のありかたが検討されなければならない。

文 献

天羽幸子 1971 ふたごの育て方、国土社

Bakwin, H. 1954 Early infantile autism. *J. Pediat.*, **45**, 492-497.

Bruch, H. 1959 The various developments in the approach to childhood schizophrenia. In studies in schizophrenia. *Acta Psychiat. et neurol.*

scandinav. Suppl. 130; **34**: 1-48.

Chapman, A. H. 1957 Early infantile autism in identical twins. Report of a case. *AMA Arch. Neurol Psychiatry*, **78**, 621-623.

Chapman, A. H. 1960 Early infantile autism. A review. *AMA J. Dis. Children*, **99**, 783-786.

Eisenberg, L. & Kanner, L. 1956 Early infantile autism. 1943-1955, *Amer. J. Orthopsychiatry*, **26**, 556-566.

岡堂哲雄・中園正身訳 1971 エリクソンとの対話、北望社。

平井信義 1970 小児自閉症、日本小児医事出版社。

堀 要・石井高明・若林慎一郎ら 1965 自閉症児の研究(その3)、精神経誌、**68**, 178.

Kallman, F. J., Barrera, S. E. & Metzger, H. 1940 Association of hereditary microphthalmia with mental deficiency, *Amer. J. mental Deficiency*, **45**, 25-36.

Kamp, L. N. J. 1964 Autistic Syndrome in One of a pair of Monozygotic Twins. *Psychiatry Neurological Neurochir.*, **67**, 143-147.

Keeler, W. R. 1958 Autistic patterns and defective communication in blind children with retrorenal fibroplasia. In P. Hoch & J. Zubin (Eds.), *Psychopathology of communication*. New York: Grune & Stratton, Inc., 64-83.

川端利彦・藤本文明・井上和子ら 1963 幼児期における自閉症の観察と経過、児童精神医学とその近接領域、**4**; 34.

Lehman, E., Harber, J. & Lesser, S. R. 1957 The use of reserpine in autistic children. *J. nerv. ment. Dis.*, **125**, 351-356.

Malamud, W. & Sands, S. L. 1947 A revision of the psychiatric rating scale. *Amer. J. of Psychiat.*, **104**, 231-237.

松野 豊・関口 昇訳 1969 言語と精神発達、明治図書。

丸井文男・蔭山英順ら 1974 自閉児の集団適応に関する研究(1)、名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **21**, 105-150。

隱岐忠彦 1970 自閉症児のものの感じ方、うけとり方教育心理研究、**21**, 37-43。

Polan, C. G. & Spencer, B. L. 1959 A checklist of symptoms of autism of early life. *W. Virg. Medical Journal*, **55**, 198-204.

原

著

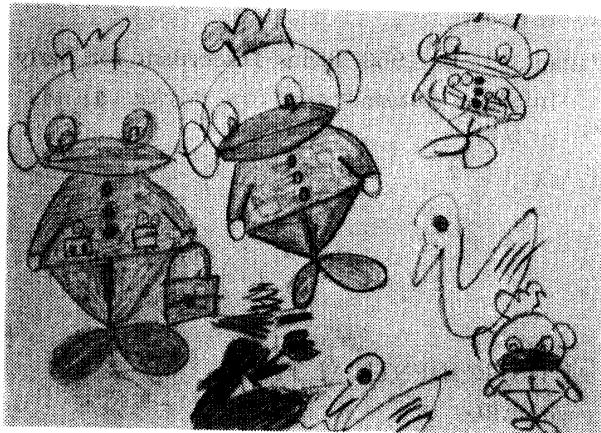


写真 1

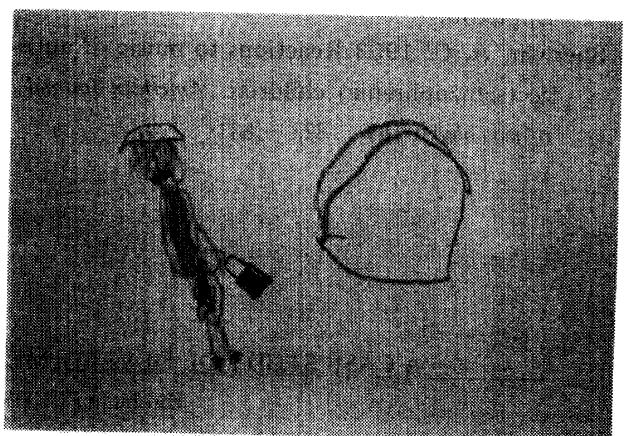


写真 4

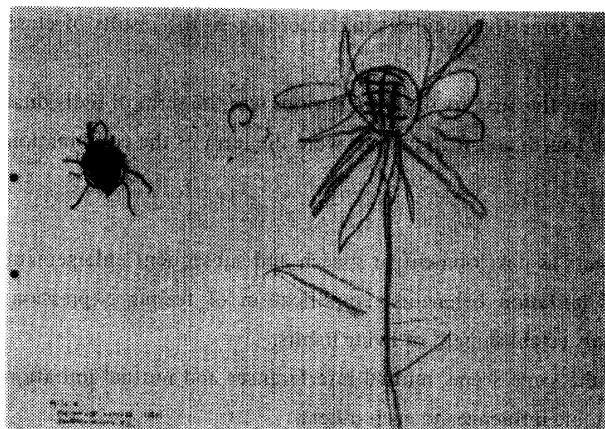


写真 2

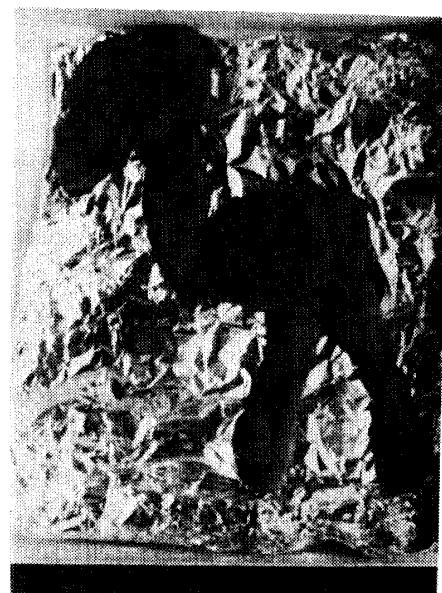


写真 5

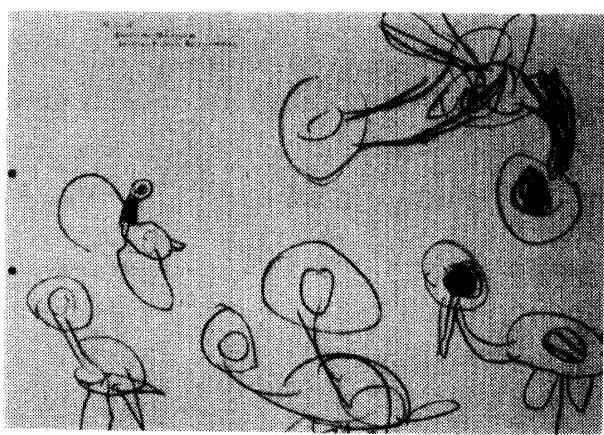


写真 3

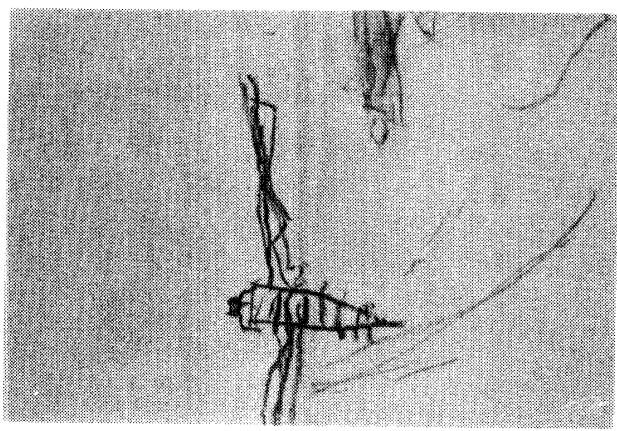


写真 6

一卵性双生自閉児の発達に関する一例研究

- Rimland, B. 1964 *Infantile Autism*. New York:
Appleton.
- Sherwin, A. C. 1953 Reactions to music of autistic (schizophrenic) children. *American Journal of psychiatry*, **109**, 823 - 831
- 津守 真・稻毛教子 1965 乳幼児精神発達診断法 大日本図書
- Vailant, G. E. 1963 Twins Discordant for Early Infantile Autism. *Arch. Gen. Psychiat.*, **9**: 163 - 167

A CASE STUDY OF DEVELOPMENT OF AUTISTIC IDENTICAL TWINS Hiromi FUKUNAGA, Fumio MARUI

This treatise is the study of the development and psychotherapeutic treatment of autistic identical twins. Psychotherapy, in this case, is fundamentally based on playtherapy, and, starting with the zest and interest shown by the twins, intensively introduced formations of situations and arrangements of environments.

The psychotherapy then proceeded to the stage where, though Case A and Case B had certain differences of degrees in their autism, fixation, and interest, both cases were submitted to the same treatment-setting according to the results of close observation, simultaneously and in parallel.

The psychotherapy were divided into five periods: a year from the first to the third periods was the term of individual treatment chiefly in the play-treatment rooms; two years covering the fourth and fifth periods were the term of the combination of the guidance in the day nursery and the individual treatment.

The results thus obtained are:

(1) Favorable turn was observed in A and B, in such respects as development of speech and subsequent enlargement of communication, decrease of autism and fixation, increase of imitation behaviors, amplification of feeling expression, enlargement of zest and interest, development of drawing and painting, establishment of living habits.

(2) As the results of the psychotherapy that was made on the same scene, mutual interferences and mutual imitation behaviors between A and B have increased, both of them giving favorable influences to each others.

This fact shows that psychotherapy for identical twins will bring about more favorable development by making psychotherapy for them simultaneously and in parallel rather than by treating them separately.